

論文

日本の勝ち組の負け

大久保 泰邦¹

投稿受付：2008年6月4日 受理日：2008年6月6日 WEB公開日：2008年7月2日

要旨

イノベーションとは社会に大きなインパクトを与える技術革新と解釈されている。経済至上主義においてイノベーションの果たす役割は、革新的技術を社会に生かすため、絶対化、画一化を行い、競争力強化を図り、競争社会を勝ち抜くことである。しかし米国人のイノベーションは、技術だけに拘らず、芸術のような文化でもかまわないと言う。昨日と違う新しい今日を創造し、これによって人間を活性化させ、幸せにする。心の豊かさまでも包含する点、日本とは考え方が大きく異なる。心の豊かさを作るにはエネルギー・資源はいらない。持続可能であり、無限に成長する。勝ち組も負け組もない。

日本は経済大国を獲得した代わりに文化、自然、美、時間を失ったと言う。石油ピークという未曾有の社会を生き抜くためには、もったいないという節約の精神に戻り、心の豊かさを求める社会に回帰しなければならない。これには価値観の大転換が必要だ。しかし米国の大統領選に見られるような、問題の核心について議論し、国民のコンセンサスを作るメカニズムが日本には無い。また移り変わることに受動的に許容する「無常」の美意識はあるが、自ら積極的に変革するという意識は薄い。経済至上主義で勝ち残った勝ち組がこれからの日本を動かそうとしている。しかしその勝ち組は成功体験に基づく間違っただけの類推をし、失敗を繰り返そうとしている。またしても米国に負けたと感じるのである。

【キーワード】：イノベーション、勝ち組、負け組、経済至上主義、競争社会、石油ピーク、持続可能、もったいない、心の豊かさ、無常、日本、米国

1. 米国のイノベーション

イノベーションとは社会に大きなインパクトを与える技術革新と解釈されている。これからの経済を活性化させるにはイノベーション、技術革新が必要との意見である。

先日、米国のシンクタンクに所属する Heaton, Jr. G.R., Hill, C.T., Windham, P.H. の3氏による米国における競争力強化のためのイノベーション政策 (Heaton, 他, 2008) について聴く機会があった。競争力強化については 2006 年 1 月のブッシュ大統領の一般教書演説で述べられたところである。

講演の中で米国のイノベーションの考え方についての話があった。米国人は新しもの好

きで、イノベーションとはまさに新しい何かを生み出すこと、また古いものを壊して新しいものを創るというダイナミックなことだ、と言う。現在モノが溢れ、欲しいモノなど無い状態で稼ぐには、新しい何かなのだ、と言う。また新しい何かであるから、技術だけではなく、音楽とか絵画とかを楽しむコミュニティー作りなどもイノベーションと位置づけている、と言う。イノベーションの意味は、新しい事・物の導入、革新、刷新、新機軸、新制度、新しい事、であるから、単にそのことを言っただけと他の聴衆は感じたかもしれない。しかし私は衝撃を受けた。

本来経済至上主義は、絶対化、画一化の上になり立つ。マーケティングで売れ筋を見

¹大久保 泰邦 (おおくぼ やすくに) 産業技術総合研究所、日本学術会議連携会員、工学博士



つけ、それを工場で等品質のものを大量生産する。そして必ず創られたものに優劣がつく。一方文化は相対性、多様性の上に成り立つ。和服は売れなくても価値は認められており、滅びることは無い。クラシック音楽と演歌を比べてどちらが良いか議論しても意味が無く、ただ好き嫌いの問題である。文化には優劣は無い。

日本人が考えるイノベーションは、絶対化、画一化を目指した技術によって競争力強化を図り、競争社会を勝ち抜く、というものである。このためには国際標準だ、特許だ、となる。

米国人の言っているイノベーションは、技術でも文化でもかまわない。昨日と違う今日があれば、人の心はハッピーになれる、というのである。

またこうも言った。米国も日本も「poor-rich country」でしょう、と。意味することは、どちらも GDP は高いが資源・エネルギーを大量輸入しており、資源小国だ、ということなのだろう。しかし私には同じとは思えない。イメージとしては、札幌を数えながらインスタントラーメンを食べている日本人と、新作のジャズを聴きながらハンバーガーを食べている米国人である。

日本は加工貿易、今の言葉ではモノ作りで稼いでいる。グローバル化による労働力の海外依存により空洞化が進み、格差社会を生んだとして問題になっているところである。一方米国はどこで稼いでいるのか、専門家に聞いたことがある。しかし答えは、いつも、「何でしょうかね」である。私は思うにひょっとしたら、コンピューターでも芸術でも、何でも新しい何かを求めており、それが人間を活性化させる、つまり幸せにして大きな付加価値を生み出しているのではないかと。米国人の購買欲の源泉は常に新しい何かを求める気持ち、なのではないか。

2. 日本文化の喪失

日本は社会が複雑になり、生産性は低下し、問題解決のためには、大量のエネルギーが必要となってしまった (Tainter, 2006、大谷、2007)。さらに日本は経済大国を獲得した代わりに文化、自然、美、時間を失ったと言う (佐藤、2006)。もったいない学会は、もったいないという節約の精神に戻り、心の豊かさを求めることがこれからの生き方であり (石井、2007)、そのためには価値観の大転換が必要だと主張してきた。

しかし米国は、もったいないとは違うが、イノベーション政策を開始するずっと前から、常に心の豊かさを求めていたのだ。米国のイノベーションとは、変化を好む生き方そのものであり、これはなにも物質的な豊かさだけ

に留まらず、心の豊かさにまで及んでいるものだった。心の豊かさを創るにはエネルギー・資源はいらぬ。持続可能であり、無限に成長する。勝ち組も負け組もない。

ある教授が大学生に、何がほしいか聞いたとき、しばらくして返ってきた言葉は「シャープペンシルの芯がほしい」だったそうである。現代はモノが溢れかえっている。他にほしいものはといえば、シャープペンシルの芯となる。それを手に入れたからといってこの学生が幸福になるとは思えない。米国の学生に同じ質問をしたらどうであろう。「新しい・・・」と、夢を語りだすのだろう。

日本人には本来「もったいない」の言葉に現れるとおり、自然に対して有限感があり、自然とともに生きる精神がある。それが日本の文化となっている。米国の新しい何かを求める文化は、拡大の文化である。日本は米国の一面だけを模倣し、物質的な拡大を目指した。その結果「もったいない」という日本古来の文化を失いかけている。

3. 変革のメカニズム

今年米国大統領選の年である。大統領選では候補者が政策を何ヶ月間も語り続ける。国民もそれを聞き、考え、だれを選ぶか決める。その過程で政策のコンセンサスが出来上がる。こうして選ばれた大統領は、国民の強力な支持の下でトップダウンの政策を実行する。方向転換は、この大統領選の機能があれば十分である。

日本人の価値観の大転換の例として、明治維新と第二次世界大戦後が挙げられる。両者とも外圧によって成された。これからの日本人の価値観の大転換は外圧無しで行わなければならない。

日本の公的立場の機関は、正確な石油埋蔵量の把握に努力している、と言う。しかし正確な石油埋蔵量を知らないということは日本にどのような影響を与えるか、について論じない。石油ピークに対して、未利用のエネルギーや原材料資源を新たに見出す努力が肝要であると言う。しかし未利用のエネルギーや原材料資源が見つからなかったらどうなるのか、どうすればいいのか、についての議論をしない。日本には問題の核心について議論し、コンセンサスを作るメカニズムが無いことを強く感じる。

4. 日本の美意識と変革

また公的立場の機関は、石油ピークになれば、「国内生産を」となり、そのための人材が必要だ、という意見である。しかし将来は現在の延長線上にはないはずで、そこで求められる人材は従来型ではない。結局ここには「新しい何か」という発想は無い。

中世以来長い間培ってきた日本人の美意識の特徴の一つである「無常」は、この現象世界のすべてのものは消滅して、とどまることなく常に変移している、ということ指している。この美意識は、自ら積極的に変革するという意識ではなく、移り変わることに對して受動的に許容する意識だと解釈できる。

やはり過去の歴史が物語る通り、外圧によってしか変革が起きないのだろうか。変革のために我々は何を待たばいいのだろうか。やはり石油ピークなのか。

経済至上主義で勝ち残った勝ち組がこれからの日本を動かそうとしている。しかしその勝ち組はまたしても米国に負けたと感じた。そしてもったいない学会のやるべきことは、

大きすぎると感じた。

参考文献

1. Heaton, Jr. G.R., Hill, C.T., Windham, P.H. (2008) New Pathways in U.S. Innovation Policy, 29 May 2008, www.technopoli.net.
2. 石井吉徳(2007)もったいない学会：WEB学会誌の創刊にあたって、もったいない学会 WEB 学会誌、Volume 1, 1.
3. 大谷正幸(2007)Joseph A. Tainter の「崩壊に関する歴史的考察」、もったいない学会 WEB 学会誌、Volume 1, 36-45.
4. 佐藤典司(2006)経済成長は、もういない、ゼロ成長でも幸せな国、PHP 研究所、303p.